

BOOK REVIEW

書評

英語医学用語—その語源をたどる
小川徳雄・永坂鉄夫著
東京教学社，2020年6月，東京

佐久間康夫（日本医科大学名誉教授・東京医療学院大学名誉学長，日本医学会分科会用語委員会委員）

環境生理学の大先輩であり，尊敬するお二人の大変な労作である。「英語医学用語」という書名に惑わされてはならない，副題の「語源をたどる」にあるように，語源の探索は詳細を究め，微に入り細を穿っている．従来少なからぬ類書にみられたラテン・ギリシャ語源を定めてよしとせず，時代的には古・中世英語や仏語の古語，遡ってはエトルリア語，サンスクリット，ケルト語，フランク語，ゲルマン祖語，地域的には煩瑣を厭わず（五十音順に）列挙すればアフリカーンス語，オランダ語，シンハリ語，ズルー語，チェコ語，デンマーク語，プロバンス語，ヘブライ語，ペルシャ語，ポリネシア語群，リトアニア語，その他アラビア語は無論のこと，バンター諸語，ケチュア語，エスペラント語といった，これでもかと博搜を究められたことに一驚する．ラテン語の格変化に由来する名詞化についての文法的解説もあり，後世代の我々は到底敵わないと思知らされる．医学用語が多様な経緯で造られ，語法に混乱があること，また時には奇を衒った全くの造語もあるといった指摘もあり，A4判600ページ，1,230gの大冊（電子天秤でちゃんと量りました）であるが，鎌倉から東京まで，電車の車中で興に乗るまま膝の上に広げてページを繰り，何回か往復するうちに通読してしまった．鎌倉は耳鼻咽喉科学会（後の医学会第28分科会）の用語統一委員会委員長を務め [1]，大部の独英羅和医学辞書 [2] を著し，小職に医学用語への関心喚起させるに至った曾祖父廣瀬渉が倒れた因縁の地でもある．

講義の際にちょっと触れると学生の記憶に残り

やすい小断にも事欠かない．ただし本書は巷間に見かけられる英語雑学辞典とも一線を画している．バルビツールは1864年フォン・バイヤーがマロン酸と尿素の縮合反応により合成したが，この名前は彼の女友達バーバラが提供した尿に因むとか，はたまた合成の成功を祝って飲みに行った酒場で砲兵将校と意気投合し，彼らの守護聖人だった聖バルバラ（建築家や石工，消防士，鋳夫，四人の守護聖人でもある）にureaを合わせたと知ることもできる．バルビツールに限らず，現在広く使われている薬物や反応の名称には，この時代のドイツ科学者の貢献が多いことが今更ながら実感される．フォン・バイヤーもバルビツールの他，インディゴの合成，フェノールフタレインの発見，ポリアセチレン，オキソニウム塩，ニトロソ化合物の研究など多数の成果をあげている．解剖学については用語がバーゼル版（BNA，1895）に始まり，現行につながるパリ版（PNA，1955）に依拠するもの，1936年イェナ版（JNA）それぞれが区別されており，たとえばBNAは直立するヒトを基準としたが，JNAでは四足歩行の動物にもあてはまる方向基準となった．マクロの解剖学では人体そのものが変わらない限り，対象は変わりようがない．本書では「ものは変わらず名は変わる」と諧謔をまじえて紹介されている．実は脳部位の名称はJNAで詳しく，PNAでは数が限られてしまった．JNAは理論を優先し，過去の用語を排除しすぎた結果日・独以外に広まらなかったということを初めて知った．現在は9,200語を定めた *Terminologia Anatomica*（1998）が行われていると

いうが、これ以上は本書を参照されたい。

特に「独断的解釈も怖れず」両先生が105項目のコラムで詳細に記述され、改めて問題を提起されている諸点のいくつかは今まさに日本医学会分科会用語委員会で数年来議論の絶えない用語・用法を含んでいる。医学会では日本生理学会は医史学会、解剖学会に次ぐ第3分科会である。2014年以来分科会用語委員を務め、言葉の取り扱いの難しさに直面してきた。本書で優性とされる dominant, 劣性・潜性とされる recessive が個体の優劣を示すから不適切で、偏見を払拭するために顕性・潜性と呼び変えると、医学会に属さない日本遺伝学会が独自に公表し、波乱を巻き起こしたことは記憶に新しい。分科会用語委員会としてはとりあえず4文字単語として優性遺伝（顕性）、劣性遺伝（潜性）と言い換えることになった。現在は「奇形」をどう言い換えるか小児科学会の提案を受けて難渋している。2015年の解剖学会・生理学会合同大会でご講演いただいた坂井建雄先生も、2018年の日本医学会公開シンポジウム「適切な遺伝学用語のあり方」（[3]で公開されている）で、言い換えてもいずれは陳腐化すると述べられた。

このシンポジウムでは、用語の変更が世間一般に大きな影響を及ぼす（たとえば高校の教科書の記述が早速変わった）ことに鑑み、記者会見などを開く際には他の学会や患者団体などと十分に調整するよう強く戒められた。これまで国際疾病分類の改訂に対する対応や、指定難病の名称の統一など重要で欠かせない議論も一貫して行われているが、いわゆる political correctness の立場からの提言も少なからず、たとえば性差別に関わる訳語[4]など現在も議論が進行中で、医学的な正しさに拘って、患者・家族の心情を無視してはいけない一方、医学的に違和感があったり、「病気ではなく」扱うことも禍根を招く可能性があり、バランスの良い着地点を探っている。本書の一連のコラムはこの問題を考えていただく良い題材である。

最後になったが両先生が心配されている、アドレナリン発見における高峰譲吉の貢献について、生理学会では教科書の記述や発表に際して一貫してアドレナリンの呼称を強く推奨してきた。たと

えば北海道大学獣医生理におられた菅野富夫先生は日本薬学会の会報ファルマシア誌上で「日本薬局方に『アドレナリン』の復権を求める」と題した強い主張を展開された[5]。これら持続的な働きかけの成果からか、2006（平成18）年4月施行第15改正日本薬局方より、旧来のAbelの命名によるエピネフリンに代わり、一般名がアドレナリンと変更された。米国では依然エピネフリンとされているが、英国薬局方・欧州薬局方ではかねてからアドレナリンが採用されており、本邦でも正当な呼称が採用されたことになる。本書はあまりの大冊で、学生諸君の手に余るかも知れないが、医学・医療系大学の図書館に配架して、紐解く機会が与えられる価値がある。特に先生方には講義に先立って一読していただければ、思わず膝を叩いたり、微笑がもれる話題が見つかるだろう。列挙されている参考図書のリストも整っており、Webでは検索しきれない情報を入手できる。現在進行中の「生理学用語集（仮称）」の編纂に携わってくださっている編集委員各位にも大いに参考にしていただければと考えて、この大著の紹介とする。

文 献

- 1) 田中助一：日本耳鼻咽喉科学会小史。日本耳鼻咽喉科会報 **66**：2-7, 1963（本論文には「明治35（1902）年4月4日第1回日本連合医学会が上野で開かれ、『高峰譲吉が自己発明の“アドレナリン”に就きて』と題する講演を行って盛会であった」との記述もある）
- 2) Hashimoto S & Hirose W：Neuestes Medizinisches und Pharmazeutisches Handlexikon, Kanehara, Tokyo, 1924（この辞書は、書名こそドイツ語であるが、第一次大戦後の独米を訪れて、今後は英語が主要な医学用語になるであろうと序文で述べている）
- 3) 下記から講演・スライドを見ることができる（2020年8月閲覧）：http://jams.med.or.jp/library/sympo_kokai2018/
- 4) 緒方 勤, 堀川玲子, 長谷川奉延, 位田 忍, 向井徳男, 安達昌功, 有阪 治, 藤枝憲二：日本小児内分泌学会性分化委員会：性分化異常症の管理に関する合意見解。日本小児科学会雑誌 **112**（3）：566-578, 2008
- 5) 菅野富夫, 飯沼和正, 中山太二：日本薬局方に「アドレナリン」の復権を求める。ファルマシア **37**：665, 2001